



望月正俊 × 好宮温太郎

cross over exhibition

4.11 - 4.30



容 姿 端 麗

組員募集

【職種】
YOU DON'T LIKE IT?

【資格】
YOU DON'T FEEL LIKE IT?

【待遇】
YOU DON'T WANT IT?

応募先：北
グレート・ジェネラル・ジョン

生き抜いていく喜び組：

Yes, I do.

「いいえ、よろしゅうございます」

もう疲れた喜び組：

No, I dont.

「ええ、ごめんこうむります」



三月終りに私の展示をした同じ場所、ひよんなことから私の後に予定していた好宮温太郎君とコラボレーションをやることになった。好宮君の得意は、紙を素材にした張りぼてアート。私の英語の方を先に彼に示し、ふさわしい作品を選んでもらった。やっっている側としてはとても面白く、また今度、今度はもっと準備をしてやってみたいと思っている。

(望月)

第7巻第4号
通巻第76号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

今日の紙面から

二面(ロンドンレポート)
桜

一・二・四画からすライブラリー)
CD『Underdog Victorious
本『報復』
アート『望月×温太郎』

四画(語面)
ハイク

我が団地は土地神話などまだまだ遙か彼方に見えもしない時代に作られただけあって、たつぷりと広場を残して作られている。このゆつたりとした空間は、嘗ての子どもたちには非常にありがたいものだった。勿論、今でもそのようなだけ、近頃では子ども人数が減っている上に外遊びをしない度合いも高いのである。我が家の前の広場で彼らが燥ぎ回る姿を見ることは滅多にない。そのお陰というも何だけれど、現在、この豊かな環境を最も享受しているのは、恐らく、猫と鳥ではないかと思う。鳥の世界を観察するのは意外に面白い。あつからかんとしていて、比較的人間を恐れぬ鶴は、たいていは単独行動か単独行動に準ずる番だつたり、トリオだつたり。椋鳥は一羽現れれば、いつの間にか、大きな集団になる。気がつくと、三十羽か四十羽か、数える気になれぬほど。鳩は番でやってくるのが殆どで、そのそと歩き回る。雀はちゅんちゅんと大騒ぎをしているものの、臆病なので、どんな小さな音でもさつと逃げ出してしまふ。鴨はペアで現れ、他の鳥を威嚇するのに忙しい。精神な顔付きの通りだと言えはそうなのかもしれないが、実のところ、少々、おつむが弱いのではないか。一羽が樹上で待機して、もう一羽が急降下で他の鳥たちを脅かすという行動を繰り返す

(最終面に続く)

からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。



桜

イースター休みも終わり、最後のチームが始まった。ようやく気候も暖かくなってきた、天気の良い日などは日差しが心地よく、春だなと言う気がしてくる。元々僕は都合が良くできていたので、冬の寒い時期にはそれを感じていないのだが、それも季節の変わり目は僕に、ようやく長い冬が終わったんだなあと感じさせる。日本では春に新年度が始まるのにも、納得がいく。よく考えてみれば、四月になっても新しい年が始まる訳でもない僕にとって、これが最後の学期なのだ。夏が来れば卒業。ちょっとした語学留学のもりでこの国に来たのが、予定よりも随分と長い間ここにいる様な気がする。それはあつという間に過ぎた時間ではあつたけれど、やっぱり短くはない。いつの間にかここに居る理由も変わり、今やその大半を占める大学生活が終わろうとしている。そう考えると、何だか少し感慨深い。

昔、結婚式場で働いていた時に、看護学校の卒業パーティがあり、盛り上がった女の子達が皆で本当に嬉しそうに卒業を祝っているのを見て、「あ、俺にはもう卒業式がこの先ないのか・・・」と思ったのを思い出した。多分、同じ学校に通った友達との連帯感や、仲間と叫ぶる関係を見て羨ましく思ったんだろう。僕は照明屋さんだったので、すぐ隣にいた音響屋さんに「いやー、何だか卒業式もう一回ぐらいやりたいすねえ」と話しかけると、よく一緒に仕事をしていたその音響屋さんは「ばあーか」とか答えてつつも、笑顔だった。きつとあの時、音響屋さんもそう思ったに違いない。その時はまさか自分にまた卒業式があるなんて思ってもいなかった。本当に、先の事な

なんて分からないものだ。

そんな訳で、高校や中学の卒業式のような一体感がある訳では無いのに、何だか感傷に浸ってしまった。春だからかなのか、これが最後の学期だからなのか、単純に卒業という言葉と友達を関連づけているだけなのか。色々な事を思い出すのはきつと、日本が恋しいのだから。まあ、こう言う時もあるか。卒業と言う事は人生の節目でもあるのに、ウダウダと悩んでいる今日この頃。「こんな時に地元草野球チームの奴らと一杯飲めればなあ」と思ってみても、出来ないものはしょうがない。色々な決断が後回しになっているが、それもそろそろ止めしようかと思う。この先また人生で何かに卒業する事はあるのかもしれない。やはり先の事はよく分からないけれども、心の中に一つはつきりとした決意のようなものを持ちたい。そんな事を思った。

卒業後の進路の選択肢の一つでもある、アーティストとしてこの国でやって行く為のサポートを受ける為の申し込み用紙を今日、提出してきた。受かる可能性は少ないのだが、もしこれに通りビザにも問題がなければ後二年はこの国にいる事になる。帰り道、遅くなった昼ご飯を食べている時に、バスに揺られている時に、どんと膨らみ大きくなる気持ちは何だったのだろう。あれは、決めかねている自分の心の奥底に潜んでいた本音だったのだろうか。叫びたくなるぐらいの、ほとんど逃げ出したい気持ちに駆られて、バスを降りた。ちょうどその時電話が鳴り、夕食を食べに行こうと誘われたのに救われた。夕食後、七時を過ぎてまだまだ表は明るかった。僕は少し肌寒いと思いつつも、もうすぐ夏が来る。胸を張って行こう。

(神山朝人)



Books

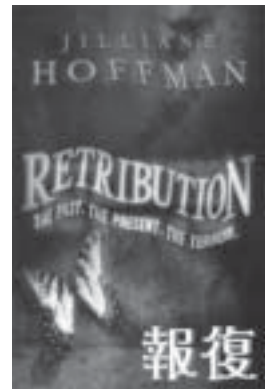
報復

ジリアン・ホフマン

ISBN:4-78-972416-6

ソニー・マガジンズ、

2004年



最近は何故だか女流作家作品によく巡り合う。案外共通しているのが、事件の当事者が主人公という事だろう。もう少し詳しく表すと、男性作家の場合は、事件の加害者と真犯人があり、それを解決する第三者の視点で描かれる事が多い。さらに言えば、ひよんな事から事件に巻き込まれてしまい、危機を乗り越えて解決していく。その場合、どこか事件に対して覚めた冷静な目で追っている。

この作品は、悲劇的な犯罪の被害者が主人公となり、被害者の視点で進んでいく。読み手によっては臨場感が倍加するのではないだろうか。

ミステリーとしては、よくある構成ではあるが、サスペンスとしては中々よく出来ている。書評によると超大型新人作家の誕生という事になるらしい。

映画化もされるとの事だが、ジョディ・フォスター辺りがさもありなん。

(小張寅僧)



CDs

四年ぶりの新作。相変わらずの、ポップでキュートな、ジル・ソビュールの世界。この半年ほど、折につけ聴いている。考えてみれば、結構な口ウエイションだ。

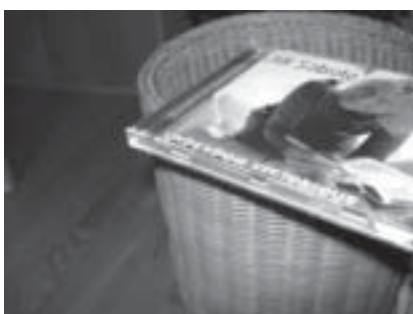
売れている……特に日本で……音楽の大半は、好き好き大好きな、あるいは、さよならさよなら好きなの的な、極端に幅の狭い世界観しか提示しない。けれども、このアルバムを読み通すと、高が歌詞、然れど歌詞というように使い古された表現を物置から引っ張り出してきたくなる。それほど、彼女の描く世界は豊かなのである。そこらにさらにあるような短篇集より余程たつぷりとした物語がそこにある。歌詞といつこく短い尺の中で表現されるがゆえに、聴き手が各々の想像力で補い、それぞれに世界を膨らませる。つまり、ジルの描くものがどう広がるのかはあなた次第であるとも言えるわけで……なんて書くと、想像力の試金石みたいで手を出しにくい。

(全太)

Underdog Victorious

Jill Sobule

Artemis Records、2004年、ATM-CD-51563



haiku

この間ブログの方にこんなフレーズを書き込んだ。

If you're sober, money shuts you up.
 (しらふならあんたをカネが黙らせる)
 Should all nights be unkind to each cowboy?
 (夜が全部向こう見ず野郎にはつれなくていいって
 うのかい?)

これを3-4-3-4-4のリズムで読んでみると、

If - you're - sober,
 mo - ney - shuts you - up.
 Should - all - nights
 be - un - kind - to
 each - - cow - boy? (字足らず)

なんだか短歌みたいだ!
 繰り返す。
 なんだか短歌みたいだ!

逆に日本語訳すればこうなる。

しらふなら
 カネが飲み助黙らせる
 夜がみんなそんな
 つれないものは

× × ×

実際、外国にも haiku や tanka、senryu があって、それなりに愛好家がいる。

英語の場合、単語を音節に分けることは出来るが、発音にかなり強弱があり、五・七・五ではリズムがおかしくなってしまうこともある。そこで響き優先で、上のような「3 4 調」にしてみたりして、いろいろ自由にやっているようだ。

たとえば次の芭蕉の句を英訳してみる。

さまざまの事思ひだす桜かな

Various things past
 Are brought to my mind
 These cherry blossoms!

これを音節 (syllable) に分ければ、

Va · ri · ous · things · past (5)
 Are · brought · to · my · mind (5)
 The · se · che · rry · blo · ssoms!(6)

読むリズムとしては、こういうつもり。

ヴェリアス - シングス - パスト(3)
 アー - ブロウト - トゥマイ - マインド(4)
 ズィーズ - チェリ - ブラサムズ(3)

まあ、とにかくあんまり形式にこだわるよりも、自由にフィードバックを大事にして創作すればよいのである。

× × ×

そういえば私も今年、花見をした。

さまざまの酒流し込む花見かな
 Various beers, sakes
 Are brought to my stomach
 Cherry viewing party!

さまざまの馬鹿呑まれ出す春の暮
 Various idiots
 Start to get drunk
 In the spring evening

気が付けば桜の下に我一人
 Coming to myself,
 Under the cherry tree
 Alone was I

名残惜し花見のあとの帰り道
 足の向くまま植木にダイブ

I hated to leave
 But I left the cherry tree
 On my way
 My feet lead me to
 The garden I dived in

コンビニでヤキソバ買った血だらけで
 At the convenience store
 I bought some yakisoba
 Bleeding on my face

以上です。望月。

(一面から続く)

望月正俊 × 好宮温太郎

cross over exhibition

4.11 - 4.30

ペリー提督 :

We would like you to accept this message from our President.

「あなた方に、このわが大統領からの親書を受け取っていただきたいのです」

三郎助 A :

We cannot accept it.

「受け取れません」

三郎助 B :

We cannot accept that.

「それは受け取れません」



入国係官 :

Basically, we welcome **any** visitors.

「基本的に、私たちはどんな訪問客も歓迎しています」

But we don't welcome **some** visitors.

「でも、歓迎しないお客さんもいるんです」

Could you show me **some** evidence-

「証拠を見せてくれますか - 」

トリ :

What evidence?

「何の証拠？」

係官 :

-that you are not infected?

「 - あなたが感染者じゃないって言う」



(一面から続く)

である。天敵というべき、粗暴な小中学生が外で遊ばないお陰で、彼らは極めてのんびりと自由空間を楽しんでいるように見える。我が家のでぶ公もその一人で、近所のおばさんにこの広場の主よねえなどと評されるほど、手前勝手に闊歩していたものである。ところが、以前ここに書いたように、小さな迷い猫が出現したことが、暫く、広境界限の混乱を招いたのである。ちび公は、ちびっ子であるが故に、猫界の常識や暗黙の了解を全く了解していないのであった。傍若無人に我が世の春を満喫するちび公。周りの大人猫たちは堪ったものではない。怒ったり、いなしたり、無視したり。良くしたもので、そんなことを繰り返しているうちに、ちび猫は何となく仕来りのようなものを学習し、いつの間にか、境界の猫社会の一員として、ぼんやりとしたポジションを確立したようである。たまさか、あーんあーん、ふうー

(一面から続く)

と揉め事を起こしたりはしているものの、大事件などなく日々が過ぎてゆく。猫という生き物は、本質的に争いを好まない。自分が持つ縄張りを侵されさえしなければ、然らう喧嘩になどなりはしないのである。その縄張りも幾許かの重なり合いを許容しており、喩えるなら、ヴェン図のような感じだろうか。勿論、絶対に譲れない場所はある。我がでぶ公くんの場合、二階の窓際の段ボールの上の寝場所だろうか。そこだけは、未だに無軌道野郎のちび公も坐ったことがない。絶対ではないけれど、多くの場合、佐藤家の屋内全般が本来は部外猫には許されていない。それにしなつて、眠そつにしたり、小腹が減って飯を分けてもらいに来ましてよ、というような趣の場合には、それほど厳しく追い立てたりしないのが、でぶ公くんの優しさである。

(一面から続く)

猫たちのゆつたりとした縄張り感覚を微笑ましく眺めるにつけ、それにひきかえ、人間てえ

(一面から続く)

やつは浅ましいやね。と。立つて半畳寝て一畳という物言いがあふ通り、それほど広くを必要としないのに、困い込む困い込む。それは人間が動物たちより想像力が優れている結果だと言うこともできるかもしれないけれど、必要以上に大きな土地、大きな家を所有したり、欲したりしている人を見ると、何となく動物として壊れているように思える。身の丈以上の縄張り根性。これが、国家になると、縄張り問題は更に重大事になる。お互いに譲り合うだの、ぼんやりと重なり合う共有空間など、全くあり得ない話だし、縄張りの境界線を迂闊に越えたりすると、戦争の口火を切ることにすらなりかねない。国家とは何なのだろう。身体だけでなく、意外に心もでかいでぶ公の姿を目にして、今更ながら、そんな素朴な疑問が心に浮かんだ。困って一体何なんだろうね。

(全六)



Ken-ichi Shinozaki,
architect

Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ

編集後記

からす新聞第七巻四号(通巻第七十六号)、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇五年五月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾



中野区本町2-50-12 ドエル中野201号

03-3379-1451

